



鳥越敦司 atushi torigoe

■■■

核爆弾 ■■■■■ ■■■

二〇三×年。■■■ ■■ ■■■ × ■■■。この日も地球の空は青かった。■■ ■■■ ■■ ■■■■ ■■■。  
が・・・・。■■ .....

「大変です首相。アメリカの核爆弾が飛んで来ました！」”■■■ ■■■■ ■■■■ ■■。■■■■ ■■■■  
■■■ ■■■■ ■■!”

「何だって！それで防げたのだろうな。」”■■■ ■■! ■■ ■■■ ■■■■■ ■■■■■■。”

「はい、何とか太平洋上で爆発しましたが・・・・。」”■■■, ■■■ ■■ ■■ ■■■■ ■■■■ ■■■  
■■■■ ■■ ....”

これは大変な騒ぎとなった。■■ ■■■ ■■■■ ■■■。

アメリカは本年度からロボットを使って軍の指揮にあたらせていたのだ。■■■■ ■■ ■■■ ■■■ ■■■ ■■■ ■■■  
■■■■ ■■■■ ■■■■ ■■■■ ■■■。

右の事件につきアメリカは、もちろん公式に謝罪した。■■■■■■ ■■■ ■■ ■■■■ ■■■■, ■■■ ■■■■  
■■■■ ■■■。だが次の日、中国とパキスタンが核兵器を飛ばし合った。■■■ ■■ ■■■■■ ■■, ■■■ ■■  
■■■■ ■■■ ■■■ ■■■■ ■■■ ■■■■ ■■■ ■■■。

先制したのは中国だったのだ。■■ ■■■■ ■■■-emptive ■■■ ■■■。これについて世界中から非難があがったが  
、中国軍首脳は、■■■■ ■■■ ■■■■ ■■ ■■■■ ■■■■ ■■; ■■■ ■■ ■■■■ ■■■■ ■■■■,  
「われわれは軍の指揮を優秀なアメリカのロボットに任せている。文句があるならアメリカへ言ってくれ。」”■■■ ■■  
■■■ ■■■■ ■■■■ ■■■■。■■■ ■■■■ ■■ ■■■■ ■■■■ ■■■ ■■ ■■ ■■■ ■■■。”  
と声明した。■■ ■■ ■■■ ■■■■ ■■■。

世界中でロボットが活躍するようになって久しい。■■■■ ■■ ■■■■ ■■■ ■■■■ ■■ ■■ ■■■ ■■■■  
■■■■。

アメリカは、もとよりわが日本でもレストランなどは大抵ロボットだし、今年からプロ野球選手も一人ロボットが現れた  
のだ。■■■■■■ ■■■■, ■■■■■ ■■■■ ■■ ■■■■ ■■■ ■■■ ■■■ ■■■ ■■■: ■■:  
■■■ ■■■■ ■■■■ ■■■■ ■■; ■■■ ■■ ■■■ ■■■ ■■■ ■■■ ■■ ■■。

その結果は、・・・・ロボットはオールスターに出場したのだった。■■■■■■ ■■■ ■■■-■■■ ■■■■ ■■■  
■■■ ... ■■。アメリカの国防省だってロボットが大分いるといわれている。■■■■ ■■■■■ ■■■■■■  
■■■■ ■■■■ ■■■ ■■■ ■■■ ■■ ■■ ■■■■。

もちろん先の戦争は国連問題となったのだが、国連の職員もみんなロボットなのだ。■■■■ ■■ ■■■■ ■■■■  
■■■ ■■■■■ ■■■■■ ■■■ ■■■ ■■■ ■■ ■■■ ■■■■■ ■■■■■ ■■。

ロボットは給料もいらぬし、故障すると他のロボットが修理することになっている。 開発はアメリカでされたが、車と同様わが国でも近年はロボットの開発は目ざましい。

ある会社では重役をロボットにしたとか、パチンコ屋の従業員は、みなロボットだし、サラ金の取立てもロボットがするそう。

もちろん失業者は増えたが、大部分の人は余暇を楽しめるようになった。

そうそう、国連の問題を話さなければならない。

しかし。

しかもリーダーのロボットを他の多数のロボットが守っている。

中国には、それは出来なかった。

この戦争の結果は？

だが、パキスタンの都市は惨澹たるもの。

そして、太平洋上で核を爆発、そのすぐ後にその爆弾を爆発させ、言葉通り、核の雲を消したのだ。

この新兵器は世界中が買い求めた。そして、ついに世界的な核戦争が始まったのだ。全面的核戦争になって恐れられていたのは核の雲だった。しかし、これで、その恐れはなくなったのだから。だが、核の雲を無くす爆弾は輸出されたものは効果のないものばかりだったのだ。それで、世界の大都市のほとんどは壊滅した。ホワイトハウスでは大統領が得意気に話している、

「どうだね、わたしの立てた作戦は？」  
「上々ですよ。」  
と副大統領が言った。

「これで、あとは日本とスイス位だね。」  
副大統領は、世界中の映像を見ながら話す。

「それも時間の問題ですよ。スイスは、ともかく、日本なんてどうにでもなるんですから。」  
と国防長官が発言した。

「それより、」  
と副大統領は発言する。

「日本のやつらも、大統領が、まさか宇宙人だなんて思ってもないでしょうねえ。」  
「ああ、彼らの頭には輸出しかなからなあ。」  
と大統領は答えて、笑った。

「しかし、わたしを受け入れた君達は賢明だったよ。」  
「そうですとも。われわれは、もう日本には勝てないと思っていたのですから。」  
悔しそうに、副大統領は述べた。

「まあ、日本が、いくらがんばろうと我々の星の文明には、とても及ばんよ。現に・・・。」  
と、話して大統領はニヤリと笑った。

「あの中国の軍事ロボットも、ここホワイトハウスで操作していたのだし、核の雲を消す爆弾も我々の星のものさ。」  
「大統領、世界はやはり我々アメリカのものですね。」  
と発言してCIA長官が立ち上がった。

「そうだと。乾杯しよう。」  
と述べる大統領はグラスを取った。

「日本に核戦争を仕掛ける日に。」  
「乾杯！」  
アメリカ合衆国首脳一同はグラスを合わせた。

無口な日本の首脳

時の首相は大変な無口で知られた人だった。長い文章は喋れないらしい。

「首相、大変です。今度は本当の核が・・・。」  
首相官邸にいた、わたしに、防衛大臣が電話してきた。

「すぐ避難を！」

その後、わたしは地下の核シェルターへ逃げた。十分後、日本の首脳は皆、核シェルターに集まった。

「首相、どうします？」  
日本の首脳一同は、異口同音で聞いた。

「そうだな。われわれだけが生き延びればいけないか。とても勝ち目はないよ。」  
と、わたしは答えた。

「そんな・・・。」  
首脳一同が、そう嘆くのを、わたしは上の空で聞いていた。

<http://p.booklog.jp/book/106312>

著者：鳥越敦司 atushi torigoe

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dontanine/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106312>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106312>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ